

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 20 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02462

研究課題名(和文) 比較植民地文学研究の新展開--「語圏」概念の有効性の検証

研究課題名(英文) Overlapping linguistic-spheres, Toward a new trend of comparative study of colonial and post-colonial literatures

研究代表者

西 成彦(NISHI, Masahiko)

立命館大学・先端総合学術研究科・教授

研究者番号：40172621

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：国土と国土は、国境を隔てて拮抗するものだが、語圏と語圏はかならずしもそうではない。帝国主義の時代には、語圏相互の重なり合いのなかから膨大な文学作品が産み出された。また、グローバル化が進む現代、語圏間の重なり合いはいっそう複雑化する傾向にある。このことを、かつて帝国日本の影響下にあった東アジア、そして西欧列強の影響下に成立した南北アメリカを主たる対象に据え、相互に比較対照した。比較植民地文学研究という新しい研究方法の模索。

研究成果の概要(英文)：National territories are not supposed to overlap but different linguistic-spheres often coexist, for example in colonized areas or in so-called global cities. It is notable that more and more works are produced at the crossroads of plural linguistic-spheres. This research is an effort to invent a new method of comparative literature, which could be adapted to the study of colonial and post-colonial literatures. The main fields are 1) the East Asia which had been ruled or militarily occupied by Imperial Japan and 2) North and South Americas where the hegemony of dominant European languages is irreversibly established.

研究分野：比較文学

キーワード：言語圏 植民地文学 ポストコロニアル文学 世界文学 バイリンガル

1. 研究開始当初の背景

2012年から2014年にかけての3年間、「基盤研究(C)比較植民地文学研究の基盤整備(課題番号:24520411)」を通して得られた知見に基づき、ここでは新たに「語圏」なる概念を用い、新しい比較文学研究の方法を模索することとした。国家と国家、帝国と帝国は、境界をもってせめぎあい、拮抗するが、「語圏」と「語圏」は、拮抗ではなく、重なり合い、もつれあう。単著『バイリンガルな夢と憂鬱』(人文書院、2014)は、こうした問題を「バイリンガル」の問題として取り上げたもので、帝国日本が生み出し、日本の植民地喪失によって結果的にもたらされた「語圏」間の関係変容を炙り出す試みであった。本研究は、その成果を活かしつつ、東アジア地域の比較文学史をめぐっての新展開を試みるものであり、同じ着想が、南北アメリカ大陸の文学(将来的にはアフリカ大陸の文学)をとらえなおす上での視座の獲得にどう役立てられるかという問いに答えを出すことを、もうひとつの目標に据えた。

2. 研究の目的

20世紀のアジアで唯一、植民地主義帝国としての道を歩んだ日本は、豊かな「日本語圏文学」を産み出し、その勢力圏は広域に及んだ。しかし、その諸特徴を見るためには、スペイン、ポルトガル、オランダ、英国、フランス、あるいはロシア、ドイツといったヨーロッパ列強の「語圏文学」との比較対照が不可欠である。しかも、そうした覇権を笠に着た「語圏」の影響下に成立した被植民者側の文学(「国民文学」未滿の「語圏文学」)のことも絶えず視野に入れておく必要がある。そうしたときに「国民文学」相互の比較といった色彩が強い、古典的な比較文学の手法では足りない。帝国間の戦争は、軍事的なものにとどまらず、言語間の覇権争いの様相を呈したし、帝国の言語と被植民者の言語の対立(非対称的な関係)も激烈なものであった。こうした現実を前にして、ポストコロニアル批評が導入を試みたのは、「語圏」の障壁をとりはらって、帝国主義時代の世界文学、ポストコロニアル時代の世界文学に共通する特徴を、惑星大のスケールで見究めるというダイナミックな研究手法であった。

3. 研究の方法

1990年代以降のポストコロニアル批評の隆盛と定着、および東アジア地域における現代文学研究の国境を越えた連携強化を踏まえて、その歴史的経緯を「語圏」相互の「非対称」な関係として記述する方法を鍛え上げるべく、南北アメリカ大陸におけるスペイン語とポルトガル語、オランダ語、英語、フランス語の相互交渉と棲み分けをめぐる比較文学的研究との接点をさぐる。その際には、コロンブス以降の西洋列強の言語と、先住民の言語とのあいだの「接触」、さらにはア

メリカ諸国の政治的独立以降に移り住んだ新移民の言語の「定着」にも注目することで、南北アメリカ大陸の500年を「語圏」概念を用いつつ記述する道が開かれるであろう。そして同じ方法が、ゆくゆくはアフリカ大陸の文学状況の理解にも資するであろうとの展望をもって研究に臨む。

南北アメリカ大陸の事例は、欧州やアジア、あるいはアフリカ大陸の事例を考える上で、「基準」とは言えないまでも、有効な「参照枠組み」を提示してくれるだろう。

4. 研究成果

帝国日本の盛衰にともなう東アジア文学の歴史を「語圏」概念を用いながら記述する試みは、『外地巡礼 「越境的」日本語文学論』(下記図書)として、ひとまず完成を見た。そこでは、「多言語の島」としての長い歴史を持つ台湾において、「日本語圏」や「華語圏」、さらに「原住民族等が支えている少数派の言語圏」、それらがどう重なり合い、相互に交渉してきたのかについての考察を試みた。同書の執筆途上、台湾の大学での数回の招待講演をこなしたが、そこで得たものは大きく、本研究が台湾の文学研究者のあいだにも一定のインパクトを行使できるものであるとの感触が得られた。

またカリブ海を取り囲む大小アンチル諸島を含む南北アメリカ大陸の文学に関しては、本務校(立命館大学)の国際言語文化研究所のプロジェクト(環カリブ海地域における言語横断的な文化/文学の研究)とも連携しつつ、「スペイン語とポルトガル語、オランダ語と英語、フランス語の相互交渉と棲み分け」をめぐる資料収集と共同研究を進めたほか、パピアメント語など、同地域の文化現象のなかでクレオール諸言語が果たした役割をめぐる考察も一定の成果へとたどり着いた(下記雑誌論文)。

他方、南北アメリカ文学において「新移民」が諸国の文学にもたらし、またもたらしつつある寄与については、従来から注目してきた「日系文学」に加え、亡命ポーランド文学(下記雑誌論文)や、東欧発のユダヤ系文学である「イディッシュ文学」(下記図書を参照)の世界展開にも注意を払い、現在は「南北アメリカにおける語圏の淘汰と並立」について、著書の完成を急いでいる。そこでは(1)先住諸民族の言語、(2)西洋五大列強の言語、(3)奴隷制社会のなかで新規に成立したクレオール諸言語(フレンチ・クレオールやパピアメント)、(4)19世紀以降の新移民の言語が、さまざまな形で「相互交渉と棲み分け」をくり返していることが浮き彫りになるはずである。このように「カリブ海を取り囲む大小アンチル諸島を含む南北アメリカ大陸の文学」を一望に収めた文学論は、これまで国内外で類例を見ないものであり、本研究終了後の直近の課題はこれである。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 6 件)

西成彦、アフター・ザ・テンペスト
脱植民地化と自由、立命館言語文化研究、
査読無、29 巻 4 号、2018、91-99

http://www.ritsumeit.ac.jp/acd/re/k-rsc/lcs/kiyou/pdf_29-4/lcs_29_4_nishi.pdf

西成彦、先住民文学の始まり 『コシ
ヤマイン記』の評価について、立命館文
学、査読無、652 号、174-183、2017

<http://www.ritsumeit.ac.jp/acd/cg/lt/rb/652/652PDF/Nishi.pdf>

西成彦、プルースト、ジョイス、ゴンブ
ローヴィチ、ジョイス研究、査読無、27
巻、2016、116-123

西成彦、カリブ文学試論 パピアメン
ト語小説の位置、立命館言語文化研究、
査読無、27 巻 2/3 合併号、2016、207-215

http://r-cube.ritsumeit.ac.jp/repo/repository/rcube/7372/11LCS_27_23_NISHI2.pdf

西成彦、日本語文学の拡散、収縮、離散、
淡江日本論叢、査読無、32 巻、2015、71-90

西成彦、ワルシャワで再会したニーチェ
の言葉、思想(岩波書店)、査読無、2015、
2-6

[学会発表](計 8 件)

西成彦、仏領西インドから極東の日本列
島へ、世界文学から見たフランス語圏カ
リブ海(日仏会館主催) 2018

西成彦、アメリカ文学とは何か 北米
文学の現在、日本ケベック学会 2017 年度
全国大会、2017

西成彦、戦時性暴力/レイプから性奴隷
制まで、植民地文化学会、2016

NISHI, Masahiko, Ainu and Taiwan
Aborigines in Japanese Literature in
20th Century, Association of Asian
Studies, 2016

西成彦、元日本兵の帰還、文藻外語大学
日本語学科日台アジア未来フォーラム、
2016

NISHI, Masahiko, Incompatibility and
authenticity of testimonies, an
Analysis of Akutagawa Ryunosuke 's In

a Bamboo Grove, Semiosis Research
Center of Hankuk University of Foreign
Studies, 2016

西成彦、中欧か東欧か、その多言語性に
ついて、城西大学中欧研究所、2015

西成彦、日本語文学の拡散、収縮、離散、
淡江大学日本研究学会、2015

[図書](計 6 件)

西成彦、外地巡礼 「越境的」日本語
文学論、みすず書房、2018、312

ドヴィド・ベルゲルソン、ラフミール・
フェルドマン、イツホク・ブルシュティ
ン=フィネール、ナフメン・ミジェリツ
キ、デル・ニステル、ロゼ・パラトニク、
イツホク・レイブシュ・ペレツ、ズスマ
ン・セガローヴィチ、ザルメン・シュニ
オル、ショレム・アレイヘム、イツホク・
バシェヴィス・ジンゲル、西成彦、世界
イディッシュ短篇選、岩波書店、2018、
352(325-345)

石田智恵、中倉智徳、田中壮泰、田中雅
一、富田敬大、森下直紀、小杉麻李亜、
西成彦、ポール・デュムシエル、松田有
紀子、永田貴聖、川瀬慈、真島一郎、澤
田昌人、小泉義之、近藤宏、松田素二、
マルセル・エナフ、フレデリック・ケッ
ク、島亨、渡辺公三、異貌の同時代、以
文社、2017、664(243-259)

浅野豊美、小倉紀蔵、西成彦、東郷和彦、
外村大、中山大将、四方田犬彦、熊木勉、
中川成美、加納実紀代、藤井貞和、熊谷
奈緒子、上野千鶴子、天江喜久、金哲、
対話のために、クレイン、2017、336(3-7、
169-189)

奥彩子、西成彦、沼野充義、赤塚若樹、
浅井晶子、阿部賢一、阿部卓也、荒島浩
雅、飯島周、井浦伊知郎、伊東伸宏、井
上暁子、今井敦、岩崎悦子、鶴戸聡、大
塚直、小椋彩、加藤有子、木村英明、國
重裕、久野量一、久山宏一、栗原成郎、
越野剛、櫻井映子、佐々木とも子、芝田
文乃、須永恆雄、住谷春也、高野史緒、
田中壮泰、つかだみちこ、土屋勝彦、寺
島憲治、都甲幸治、栃井裕美、永畑紗織、
中丸禎子、原田義也、平野清美、福田千
津子、堀茂樹、三谷恵子、宮島龍祐、茂
石チュック・ミリアム、築瀬さやか、山
崎佳代子、山本浩司、早稲田みか、和田
忠彦、東欧の想像力、松籟社、2016、
320(247-256、302-303)

シュロイメ・アンスキ、ヴィトルト・ゴンブローヴィチ、赤尾光春、関口時正、西成彦、ディブツクノブルグント公女イヴォナ、未知谷、2015、288(264-285)

6 . 研究組織

(1)研究代表者

西 成彦 (NISHI, Masahiko)

立命館大学・先端総合学術研究科・教授

研究者番号：40172621